

中世の「殺人現場地図」から学べること



一 航 日本では近年、過去に入居者が死亡した賃貸物件、いわゆる「事故物件」を示すウェブサイ

トが注目されている。地図上のマークをクリックすると、そこで起きた死亡事案が分かる。孤独死や殺人事件など理由はさまざまだ。

英国では今、これに似たサイトが話題になっている。といっても表示されるのは不動産ではなく、路上の殺人現場。しかも発生は「中世」。13〜14世紀の現場をクリックすると、事件内容に加え、殺害に使用された「弓矢」「おの」といった中世の凶器まで分かる仕組みだ。

この「中世殺人地図」の発案者は、ケンブリッジ大犯罪学研究所のマニユエル・アイスナー教授。犯罪史を研究する過程で、2018年にロンドンを対象としたサイトを開設し、現在はオックスフォード、ヨークも含めた計3都市に拡大した。

活用したのは中世のコロナー（検視官）の記録だ。人は何に怒り、殺人まで犯すのか。記録にはそうした動機面も詳しく書かれていた。「改めて気付いた

のは、人が最も怒るのは自身が『侮辱』された時という事実です。中世は現代よりも名誉を重んじ、世間体を気にする社会でした。このため公衆の面前で屈辱的なことを言われた場合、相手を殺すほどの争いに発展しました」とアイスナー氏は話す。

名門大学の学生が住むオックスフォードでの殺人は特に多かった。人口あたりの殺人発生率はロンドンやヨークの4〜5倍。血気盛んな若者が、当時は所持が合法だった剣や弓矢を携帯していたことも大きい。「1298年、中心街の居酒屋で若者同士の口論が起き、剣やおのを使った大乱闘に発展。死亡者が頭部に負った傷は、脳にまで達していた」。地図上の現場をクリックすると、こうした実例が詳細に分かる仕組みになっている。

さて、現代人はここから何を学ぶべきか。アイスナー氏は「今も昔もやはり礼儀が重要という事実でしょう」と話す。中世の英国ではカツとなって相手を侮辱した場合、時に命まで失った。礼儀はこうした衝突を避ける「知恵」とアイスナー氏は言う。

シンプルだが、数百年前の記録から学べることは今も多い。いつの世も変わらない怒りのメカニズムの実例がそこにある。